宗教倫理学会 2023 年公開講演会
公開講演
2023年3月11日（土）
於　キャンパスプラザ京都・2Fホール

講　師

佐藤 直樹（九州工業大学 名誉教授）

演　題

なぜ日本社会は息苦しいのか？
同調圧力と世間

コメンテーター

澤井 義次（天理大学 名誉教授）

司　会

那須 英勝（龍谷大学 教授）

なぜ日本社会は息苦しいのか？
同調圧力と世間

佐藤　直樹（九州工業大学名誉教授）

今、ご紹介いただきました佐藤です。今日は、話す機会を与えていただきましてありがとうございます。本日は「なぜ日本社会は息苦しいのか？　同調圧力と世間」というテーマでお話をしたいと思います。

私自身は40年近く大学で法学を教えておりましたが、ある日、ふと「日本人は法律を信じていないのではないか」とハッと気がつきました。ちょうどその頃、歴史学者の阿部謹也さんが『西洋中世の愛と人格』(朝日新聞社)という本を出しまして、「日本における世間についてきちんと考えないといけないのだ」ということで、「ああ、そうだったのか、日本人は実際、法を信じていないけれども、世間の方は信じている、これは世間について考えなくちゃいけない」と気がつきました。それまで真面目な(？)法律学者だったのが完全にグレてしまい、1999年、20数年前になりますが、阿部さんたちといっしょに「日本世間学会」という、日本の世間について考察する学会を立ち上げまして、それからずっと活動を続けています。年に二回くらい東京で研究大会をやって、今はZoomでもやっています。これが、「世間学」という学問を日本で初めて立ち上げた経緯になります。

世間学というのは、お聞きになったのは初めてではないかと思いますが、その観点から、「なぜ日本社会は息苦しいのか？」ということをお話したいと思います。もともと日本の社会は同調圧力が非常に強い。真鍋淑郎さんが、2年くらい前にノーベル賞を受賞された時の記者会見で、彼は1975年に国籍を日本からアメリカに変えているのですが、アメリカに変えた理由を聞かれて、なんと言ったかというと、「日本社会は調和を重んじる社会だ。私はそれがちょっと苦手だ」といって笑いを誘っていました。もともと日本は同調圧力が強い国だったわけですが、ご存じのように、ここ3年のコロナ禍の中で、他の国と比べて日本の社会は同調圧力がかなり強い国ではないかということが、明らかになったことがあったわけです。私に言わせれば、これは「世間」が暴走し、狂暴化することで、「自粛警察」とか「マスク警察」とか、ほとんど海外では考えられないことが日本に起きたということです。こういう日本の同調圧力の強さというのが、コロナ禍の中で明らかになった。

ちょうど今日は3月11日で、東日本大震災が起きた日です。実はこの時にコロナ禍と同じことが起きたのです。なぜコロナ禍の中で同調圧力が席巻するという現象が起きたのかといえば、それは他の国にはない「世間」というものが日本にあって、それが根底にあったので強い同調圧力が生じた。それ以前にこれがはっきりと露出したのが、2011年の東日本大震災の時です。

これはご存じのように、海外からメディアが入ってきた時に、被災者が避難所で秩序立った冷静な行動をしているのを見て、「日本では略奪も暴動も起きない」とびっくりして、大絶賛されたわけです。なぜそういうことになったのかといえば、話は簡単です。海外の場合には「社会」というものがありますけども、社会を動かしている原理は「法のルール」です。そうしますと非常時には、たとえばアメリカなどではハリケーンが起きた時に略奪とか暴動が普通に起きる。なぜ起きるかというと、非常時とか災害になると警察が動かなくなる。警察が動かなくなるということは、「法のルール」が働かなくなる。「法のルール」が働かなくなると略奪とか暴動が起きやすいからです。

日本の場合、なぜそれが起きなかったのか。実はアメリカと同じことは起きたのです。警察が機能しなくなった。「法のルール」が働かなくなったのは同じです。だけども被災者が避難所でいる時に、「世間」がすぐにできた。「世間のルール」が立ち上がって、「お前は、トイレ掃除」とか「お前はご飯配り」とか任務分担がすぐできる。「法のルール」が崩壊した点では海外といっしょだったのですけれども、日本にしかない「世間のルール」が立ち上がったことによって、略奪も暴動も起きなかった。それがはっきりあらわれたのが、東日本大震災の時です。

これと同じことが、コロナ禍でも起きたわけですね。海外ではコロナ禍に対して「命令と罰則」、すなわち「法のルール」で対応したわけです。とくに欧米では、外出禁止命令など「命令と罰則」という「法のルール」で厳格に対処した。ところが日本の場合は「自粛と要請」であって、「法のルール」で処罰されることはない。後で罰則（過料）がついた感染症法ができましたが、とにかく当初は「自粛と要請」だけで、海外と比較すると感染者数も死亡率も、かなり低く抑えることができた。どうしてかというと、自粛をしていないお店があった場合に、「空気読め」という「世間」の同調圧力がかかる。これは「世間のルール」そのもののわけですが、そのことが結局、「法のルール」と同じくらい、あるいはそれ以上の効果を発揮した。その結果、今でも外を歩いてもマスクを100％つけているわけです。厚生労働省は昨年夏より、「町を歩く時は外していい」とアナウンスしているのに、いまでもみんなマスクをしている。みんな周りを見て判断している。結果的にいえば、コロナ禍においては、「世間」の同調圧力が奏功したことがあったわけです。

こうした同調圧力が、日本ではきわめて強いことが明らかになったわけですが、問題はこれに二面性があることです。たしかに日本は犯罪率でいうと、おそらく世界一低い。特に殺人の発生率はアメリカと比べて20分の1くらい。ヨーロッパと比べて3分の1から4分の1くらい。お隣の中国や韓国と比べても2分の1から3分の1ぐらい。もちろんこれはいいことであって、圧倒的に犯罪は起きないのですが、自殺率が非常に高いのですね。つまり日本の国は同調圧力が強いために犯罪は低く抑えられたとしても、同時に今度は、他人を殺さないが自分を殺すわけです。自殺率が非常に高い。先進国の中では最悪レベルです。この二面性が同調圧力の強さの結果として出てきている。この国は、そういう国であるということをよく自覚する必要があると思います。

阿部さんは2006年に急逝しましたが、もともと腎不全があり、人工透析中に心臓が止まったのです。2007年になって、NHKの「心の時代」という番組で、阿部さんをずっと追っかけたド

キュメンタリーが放送されました。その番組の中で阿部さんが、「イッヒ・ハーベ・レヒト」ということを言っています。ドイツ滞在中に、電話ボックスで電話をしようと思って行ったら、先に電話をしていた人がいた。いつまでも電話をしている。コンコンコンとドアを叩くと、その人が「イッヒ・ハーベ・レヒト」と言ったそうです。「レヒト（Recht）」が権利という意味で、「私には権利がある」という意味です。しかしこれを日本でいうと角が立つ。実は Right という言葉が日本では定着していない。「権利」という言葉が、その言葉自体、ほとんど定着していない。英語の Right という同じ意味で、「権利」が使われていないのです。「権利」という言葉は明治時代、1886年頃に入ってきた言葉ですが、Right という言葉を「権利」と翻訳したのです。英語の辞書を見ると、Right という言葉には「権利」以外にもう一つ、重要な意味がある。「正しい」という意味があります。これは「権利＝正しい」という意味です。ところが日本では、「あいつは権利ばかり主張する嫌なヤツだ」とか「権利には必ず義務が伴う」とか言われる。「権利」という言葉が、あまりいい意味で使われない。ところがこれが欧米だと Right という言葉は、もっているだけで正しい。これが定着している。「イッヒ・ハーベ・レヒト」という言葉で阿部さんが指摘したことが、これでした。

さらに、阿部さんが明らかにしたことで非常に大事なことは、12世紀前後までヨーロッパでも「世間」があったということです。今の日本の「世間」と同じような人間関係のつくり方があった。でもそれが、12世紀前後を境にしてしだいに「社会」に変わっていった。「Society」に変わっていった。その結果今では、「世間」は欧米では存在しないということです。ところが日本の場合には、「世間」という言葉がすでに『万葉集』に出てきます。

山上憶良の「貧窮問答歌」の中の「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」が有名です。ここでは、「世間」という言葉を「よのなか」と読ませています。つまりこれは1200年前からの概念なのですが、意味はほとんど今と変わりません。スマホなど、人間関係の電子的なコミュニケーション手段が発達した現在のような世の中になっても、おそらく日本人の人間関係のつくり方、頭の中の考え方は1200年くらい変わっていない、というところが大きな問題だろうと思っています。

欧米の場合には12世紀前後に、それが「社会」に変わっていった。日本では明治時代に「Society」を翻訳して社会という言葉を造語した。ところが、「Society」という言葉を明治時代の人が翻訳した時、これを「世間」と訳さなかった。1000年以上の歴史があった「世間」とは訳さなかった。なぜか。「世間」とは違うものだと思ったからです。社会だけではなく、「個人」という言葉も、「individual」という言葉が明治時代に入ってきて、当然、個人という言葉は江戸時代になかったわけですから、新たに造語したのです。個人が集まって社会ができる。人間の尊厳とか権利と一体になった言葉が、「individual」や「Society」であるということが明治時代の人はわかったので、「世間」と翻訳しなかった。これは炯眼だったと思います。

それで問題は、社会という言葉は現在あります。個人という言葉もあります。しかし社会も個人という言葉もあるが、実体がないということです。現在の「Society」や「individual」として欧米で語られる内容と、日本でいわれる社会と個人は全く違う。そこが最大の問題で、明治時代以降日本では、社会と「世間」の二重構造ができあがった。日本は明治期に近代化＝西欧化を

して科学技術とか法制度、憲法を含めて、そういうことの輸入には成功したわけです。ところがその根底にある社会という人間関係のつくり方、「Society」という人間関係は定着しなかった。言葉は入ってきたけれども、定着しなかった。今でも言葉があるけれども、実体がないというのが問題で、実体がないということは、社会はあくまでもタテマエで、「世間」がホンネになっているということです。

「世間のルール」と「法のルール」ということでいえば、社会しかない海外ではコロナ禍は「法のルール」で対応した。ところが日本の場合は社会と「世間」の二重構造になっていて、しかも「法のルール」で対応したのではなく「世間のルール」で対応した。「世間」が下部構造＝土台になっていて、社会はその上にちょこんと乗っかっている上部構造としてある。社会がタテマエで「世間」がホンネ。そういう二重構造が日本の場合、明治以降にできあがった。コロナ禍では感染者の家に石が投げられるとか、完全に人権侵害にあたるようなことが起きているわけです。法務省はこれを「人権侵害である」とは言っていますけれども、はっきり申し上げて、「世間」では誰もそれを「人権侵害である」とは思っていないのですね。

コロナに感染したという理由だけで、バッシングされたり人権を侵害されたのは、おそらく日本だけです。欧米でも東洋人がコロナ、コロナといわれて差別されることはありましたけれども、あれはもともとあった東洋人差別にコロナ差別がくっついただけで、純粋にコロナに感染したという理由だけで差別されるとか、バッシングを受けたのは、おそらく日本だけです。それはどうしてかというと、「法のルール」がタテマエだからです。社会は「法のルール」でできています。しかし「法のルール」はタテマエで、同時に「法のルール」のなかで一番大事なのは「権利」とか「人権」という概念ですが、そういうものが日本の場合、ほとんど定着していない。言葉はありますが、これが定着していないところが一番の問題だろうと思います。

配布したレジュメでは、「英語には訳せない『世間』という言葉」という見出しになっていますが、「世間」というのは「Society」でもありませんし、「world」でもないし、「community」でもない。英語に訳せない。英語に訳せないということは、少なくとも英語圏には「世間」は存在しないということです。現在の欧米のどこの国にも存在しないと思いますし、世界でも、ほとんど存在しないのではないかと私は思っています。そういう「世間」というものを、日本は歴史的にずっと維持してきた。

社会と「世間」の違いですが、社会は「ばらばらの個人からなりたっていて、個人の結びつきが法律で定められている人間関係」です。社会は「個人」からできている。そして「法のルール」が支配している。「世間」の場合、その二つがない、個人も法律もない。そして「法のルール」ではなく、「世間のルール」で動いている。私は日本人が集団になった時、3人以上の人間がいる時、そこに「世間」が発生すると考えています。これは、吉本隆明さんが『改訂新版　共同幻想論』（角川ソフィア文庫）の中で、「3人以上の人間がいる時に共同幻想が成立する」といっていますが、「世間」も一種の共同幻想と言えます。学校も会社もサークルもご近所も学会も、全部「世間」です。それだけではなく、日本全体が「世間」になって、特定の人間をバッシングすることもあるのですね。

融通無碍で、いくらでも規模を変えるという、非常にとらえにくいものが「世間」だと思っています。同時に「世間」がどこにあるかといわれたら、机とか椅子とかのように触って確認することができない。どうしてできないかというと、頭の中にあるからです。頭の中に存在する。その意味で、頭の中に存在するものを対象化する、それを外に取り出して客観的に見ることは非常に難しいのですね。日本人は「『世間』を離れては生きていけない」と思っていますから、それを意識することはほとんどない。またその必要もない。ただ「世間」からバッシングされたり、とんでもない目にあった場合には意識することがあると思います。そうでない限り、普通に生活している時には意識することもないというのが「世間」です。

「世間」があることで、日本には他の国にはないような細かい「世間のルール」がたくさんある。それが強い同調圧力を生み出している。ここで四つほど、同調圧力を生み出すルールを挙げておきます。鴻上尚史さんは、『「空気」と「世間」』（講談社現代新書）の中で5つ挙げていますが、内容はほとんど同じです。

一番目は「お返し」ルールです。すなわち、阿部さんはそういう言い方をしていますが、「贈与・互酬の関係」です。これに対して社会しかない欧米には、「お返し」ルールはない。「法のルール」ですから、契約関係が「社会のルール」になります。お中元やお歳暮が典型的です。毎年二度、贈り物がこれほど飛び交う国は世界中にない。贈り物をお互いにすることによって、互いの関係を円滑にすることを、日本人はかなり長いことやってきた。たとえばバレンタインデー。とんでもなくたくさんのチョコレートが、2月14日のバレンタインデーの日が近づくと、お店に並ぶわけです。もともとバレンタインデーはヨーロッパの習慣ですが、日本に「贈与・互酬の関係」があるために全国に広がり、女性が男性に対して愛を告白するはずだったものが、いつのまにか、「義理チョコ」とか「逆チョコ」とか「友チョコ」とか、どんどん拡大していったわけです。贈答する、贈り物をする習慣が日本の中に「世間のルール」としてあったものですから、バレンタインデーはどんどん広がっていった。

これに対して3月14日は「ホワイトデー」です。これは実は日本産の習慣で、福岡のお菓子屋さんである「石村萬盛堂」のホームページを開くと書いてありますが、「ホワイトデーにはマシュマロをというのは、うちがつくったんだ」と。バレンタインデーでもらったなら、ホワイトデーにはお返ししないといけない、というわけです。「お返し」ルールが刷りこまれているので、ホワイトデーを仕掛けるとアッという間に全国展開して売れるわけです。

これと同じことなのですが、贈答するのはモノに限らない。メールでもいい。たとえば「既読無視」といって、ラインで読んでいるのに返事をしないと非難されます。なぜそんなことで非難されないといけないのか、考えてみるとよくわからないのですが、「世間」の「贈与・互酬の関係」、つまり「お返し」ルールに反することをしたのだ、ということなのですね。困るのは、そういうことをすると自分の人格評価につながることです。「あいつは、そういうヤツだ。返事をしないような失礼なヤツなんだ」と、人格評価が低くなる。さらに「即レス」は、すぐ返事をしないといけないということです。「贈与・互酬の関係」は、マルセル・モースも言っていますけど、北米の「ポトラッチ」のように、相手に心理的な負担を負わせるために贈り物をする。「もらったら返さないといけな

い」と思うのは心理的な負担になる。だから直ちに返して心理的負担から逃れるということを、日本人はずっと長いことやってきたわけです。

契約関係など「法のルール」は「社会のルール」だと言いましたが、問題は、ヨーロッパでは12世紀前後に「世間」がだんだん否定されていって、社会がしだいにできてきたことです。これで一番大きかったのは都市化もありますが、キリスト教の浸透なのですね。1215年にローマ近郊で「ラテラノ公会議」が開かれて、「成人男女は1年に一回、教会に行って告解をしなさい」と定められるわけです。その中で教えに反することをやると「贖罪」として、「パンと水だけで一カ月」といった形で、罰を受けたのですね。そのことを通じてキリスト教会は、全ヨーロッパにキリスト教を普及させていくわけです。

キリスト教が「お返し」ルールを否定したことについては、『新約聖書』の「ルカによる福音書」14章に書いてあります。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかもしれないからである」といっています。「宴会を催すときには、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、彼らはお返しができないから、あなたは幸な者になる。正しい人たちが復活するとき、あなたは報われる」と。「報われる」とはどういうことか。天国に行けるということです。つまり誰かを招いてご飯を食べさせる時は貧乏人を招きなさい。なぜかというと、その人はお返しができないからだと。これは当時、ゲルマン社会にあった贈与慣行、現在の日本のお中元もそうですが、現世の「お返し」ルールを否定して、それを神との関係に変えた。これを阿部さんは、『ヨーロッパを見る視角』(岩波書店)の中で「贈与慣行を転換させた」と言っていますけども、そういう形で変えていった。「お返し」ルールの変化は、「世間」から社会に移行する時、ヨーロッパでは、その根底にキリスト教の浸透があったわけです。キリスト教の教えの中で「お返し」ルールを否定していった。

現世の「お返し」ルールを否定した結果、キリスト教的な贈与は「無償の贈与」となった。「無償の贈与」が基礎になって多額の寄付行為が生まれる。これで、欧米における博物館とかボランティア団体とかにたくさん寄付が集まるわけです。日本の場合は「お返し」ルールしかないから、「見返り」がないとダメなわけです。みんな見返りを期待しているわけです。ところが、キリスト教的な贈与は「無償の贈与」ですから、見返りを期待しない。寄付が集まる。日本の場合は、そういう寄付は集まらない。私は大英博物館に1991年に行った時、びっくりしたのですが、当時、入館料はタダでした。寄付でやっている。それくらいお金が集まる。日本の場合、無料でやっている博物館とか美術館は、ほとんどないのではないかと思います。そのくらい違うわけです。これが「お返し」ルールです。

二番目が「先輩・後輩」ルール。べつな言葉でいえば、「身分制」のルールです。これに対して「社会のルール」は「法の下の平等」なんです。「法の下の平等」が「社会」を貫いている。日本では「法の下の平等」という「法のルール」はタテマエで、「身分制」という「世間のルール」がホンネである。

面白いことに、「先輩・後輩」という日本語は英語にならない。基本的に英語の関係はフラッ

トな関係ですから、「先輩・後輩」という上下関係は存在しない。はっきりいって日本語は「世間」の言葉であって、現在の英語は社会の言葉と言えると思います。たとえば英語の I、You という一人称・二人称ですが、日本語ではたくさんある。「俺」「てめえ」「私」「あちき」「あなた」「お前」「君」と山のようにある。ところが英語では一人称・二人称は一つしかない。相手が大統領だろうが友だちだろうが、全部 I と You。タメロで言う。日本語は相手が首相と友だちの場合では、言葉を変えないといけない。それは日本には「身分制」があって上下関係、つまり「先輩・後輩」とか「年上・年下」とか「格上・格下」とか、人間が集まった時に、必ず上下関係の序列が生まれるからです。その身分によって言葉を瞬時に変えないといけない。とにかく相手に会った時、敬語もそうですが、瞬時に変えないといけないのが日本語の特徴です。日本語は「世間」の言葉ですから、「世間」の構造そのものを反映しているわけです。英語は基本的に「法の下の平等」が貫かれる。もちろん英語圏にも様々な問題はありますが、「法の下の平等」という原理が一応貫かれているということで、タメロでよいわけです。

「身分制」の問題は必然的に、「上下関係」の序列を生みだすために、差別の問題につながってきます。たとえばジェンダーギャップ指数は、2023年のデータで、日本は146カ国中125位。ほとんど毎年、こんな感じです。しかし、おそらくほとんどの人はその実感がない。とくにオジさんたちは実感がない。日本は国際的にみて、とんでもない男尊女卑の国だということははっきりしている。これは自戒を込めて言いますが、そういう国であることをはっきり認識しておかないといけない。けれどオジさんたちはわからないのですね。

たとえば女性差別の問題で言いますと、2021年にJOCの森前会長の「女性蔑視発言」がありました。「女性がいる会議は長くかかる」と言ったわけです。これが原因で彼は辞職せざるをえなかったわけですが、「なんであの程度のことで彼が辞職する必要があったのか」と思った人も、かなりいたと思います。彼は自分の周りの「世間」に対して発言しているつもりだった。あれが国内の委員会、オリンピック委員会ではなく、内輪の会議だったら、おそらく彼は責任を問われなかったと思います。誰も問題にしなかった。なぜこれが問題になったのか。発言した相手が「社会」だったからです。つまり「International Society」。オリンピックですからまず「国際社会」で問題になって、海外から批判が集まり、それで彼が辞めざるをえなくなったということです。

武田鉄矢さんが、森会長の問題の後で、「日本は男性優位社会といわれていますけども、私はそう思っていません。日本で一番強いのは奥さんだ」とテレビで発言しました。そう思っているオジさんはいっぱいいると思います。ここは男女間の関係の「ねじれ」というか、ややこしい問題があるわけなのですが、 2020年に渡部建さんが不倫をしたことを、妻の佐々木希さんが「世間」に対して「申し訳ありませんでした」と謝ったんですね。だって浮気された妻が、なぜ「世間」に対して謝る必要があるのか。全然、彼女には責任がないでしょう。でも日本では謝らないといけない。このときに「世間」は何を求めていたかというと、「妻の監督責任」です。「旦那をちゃんとみてなかったから、お前が悪い」と「世間」は妻を非難する。それに対して謝らないといけないのが日本で、つまり家族の中で妻は夫と対等ではなく、夫に対して「母親」でないとい

けないと。「世間」は、そう考える。しかしこれは、そういうことを強いられる女性の側にとっては、実は抑圧であり、差別でしかないわけです。だけど、そういうことはなかなか意識されない。意識されないのは、「世間」が「身分制」という差別の構造をもともともっていて、女性差別の問題だけでなく、さまざまな差別が、そこにあるわけです。それが日常的な生活になっているので、そういうことがあってもなかなか気がつかないという問題があって、こういう問題は自覚しにくいということが日本の場合、あるのですね。ここが「先輩・後輩」ルールの大きな問題点です。

たとえばアメリカでも、もちろん差別はあるわけです。特に黒人差別などが深刻な問題としてあるわけですが、だけど権利とか人権という言葉を使って、差別された側は闘うことができる。日本の場合、権利とか人権はタテマエですから、それをいってもたとえば「ポリコレ（ポリティカル・コレクトネス）ですね」とイヤミを言われたりして、それで闘うことは日本の場合、きわめて難しい。これはLGBTQ＋でも、すべての差別問題に共通します。

三番目は「共通の時間意識」のルールです。日本では、いっしょにいる、いっしょの時間を過ごすことが大事だと思っている。私はこれを、「出る杭は打たれる」ルールと言っています。これ対して欧米の場合には個人がいますから、あくまで時間意識はばらばらで、社会は「個人の時間意識」から成り立っています。「世間」においては、共通の時間を過ごすことが大事です。たとえば会社で仕事をしていて、自分は仕事が終わった。しかし同僚がまだやっていると自分は帰りにくい。同調圧力を受けるわけです。なぜ受けるのか。それは仕事の内容はともかくとして、いっしょの時間を過ごすことが会社では大事だ、「世間」ではこれが大事だとみんな思っているからです。「お前、先に帰るのか。冷たい」となるわけですね。冷たい目に抗して、自分が先に帰るとことは勇気がいることです。

「出る杭は打たれる」ルールには、二つの側面があります。一つは「個人の不在」。もう一つは「人間平等主義」、これは中根千枝さんの言葉です。個人という言葉は日本人にとって厄介な言葉です。個人という言葉はあります。明治時代に輸入されて個人という言葉をつくった。たしかにあるのですが、非常に厄介で、わかりにくい言葉です。

W・H・オーデンという、20世紀のイギリス生まれの有名な詩人がいます。ヨーロッパでは「12世紀に個人が誕生した」というのが定説になっています。そういうことを書いてある本があります。コリン・モリスは、『個人の発見』（吉田暁訳、日本基督教団出版局）という本の中で、ヨーロッパの個人を最もよく表すものとして、本の最初のところでこのオーデンの詩を引用しています。「私の鼻先30インチに、私の人格の前哨線がある。／その間の未耕の空間は／私の内庭、直轄領／枕を共にする人と交わす／親しいまなざしで迎えない限り／異邦人よ、無断でそこを横切れば／銃はなくても唾を吐きかけることもできるのだ。」（阿部謹也訳）という内容です。

これは、私にいわせれば非常に奇妙で不思議な詩です。30インチは76センチくらい。これが個人の範囲だと、「人格の前哨線」だといっています。その中に入れるのは自分の恋人だけだと。それ以外の人間が、もし入ってきたら「異邦人」で、銃はなくとも唾を吐きかけることができる。銃をぶっぱなさなくても唾をペッと吐く。私は日本人なので「わかるか？」といわれると、わかんないです。これが欧米の個人の感覚なのですね。個人という言葉は、これを前提にしてい

る。たとえばコロナ禍の中で、「ソーシャル・ディスタンス」ということが言われました。2メートルくらいですかね。日本人は何のことか、意味がわからないと思います。しかし欧米の人にとってはソーシャルですから、社会は個人からできあがっている。個人の範囲・距離とは、76センチです。ソーシャル・ディスタンスは、その3倍くらい。おそらくこれが感覚的にわかるのではないか。それが我々は、わからない。個人から社会ができている、個人の距離は76センチだと。欧米人はピンとくる。日本人はピンとこない。だから個人というのは非常に厄介です。いま我々は普通に個人という言葉を使いますけど、「individual」と個人は違います。これは決定的な問題だと思っています。

『ハーバード白熱教室』が、10年くらい前に流行りました。ハーバード大学のマイケル・サンデル先生が教室で学生に質問すると、みんな学生は手を挙げて答える。あれを「日本の大学でやれ」と言われてもできないのです。なぜかというと、学生たちはみんなまず周りを見るから。小学校の中学年くらいまでは「1＋1は？」と言われたら、みんな手を挙げたんです。「ハイ、ハイ」と。高学年になると、みんな手を挙げなくなる。後ろから突かれるんですね。「生意気だ」ということで。中学校になるとだんだん手を挙げる者がいなくなって、高校で手を挙げる人間は絶滅危惧種になり、大学に来ると完全に壊滅します。というのが現代の日本の教育で、学校で何を学んでくるかというと、「世間」を学んでくるわけです。人間関係をつくる中で目立っちゃマズイ。とくに「悪目立ち」してはいけない。「出る杭は打たれる」。そういうことをだんだん学んでくるので、こうした状況になっていくわけです。

ヨーロッパでは12世紀前後に個人が生まれ、それにともなって、社会がだんだんできてきた。これが生まれる大きな契機になったのが、キリスト教の「告解」です。「confession」、告白です。カソリックの教会に行きますと今でも電話ボックスのようなものがあって、向こうに司祭が座って真ん中がカーテンで仕切られていて、こっち側に告白をする信者がいる。「私はこんな悪いことをしました」と言うわけですね。「教えに反しました」ということで「お前はパンと水だけで一カ月だ」といった贖罪を科せられわけです。罰を科せられる。これを通じて、キリスト教が全ヨーロッパに普及していったわけですけども、その時に生まれたのが個人です。自分の内面を、心の中を神さまに対してプレゼンテーションする。自分の内面を外にさらけ出すことによって「individual」が生まれる。それは内省的になること。「そういうことを言う自分とはいったい何なんだろう」と、自己について考えるようなるということです。それまでは個人が存在しなかった。もうちょっといいますと、それまでは「内面」というものは存在しなかった。「内面」が生まれて個人が誕生するわけです。その個人が社会を生み出したのです。日本の明治時代に、これが「individual」として入ってきたわけですが、個人という言葉はあるけども、今でも依然として日本には個人は存在しないと私は思っています。

「出る杭は打たれる」ルールのもう一つの側面は、「人間平等主義」です。人間には能力の差とか才能の差とかがあるけれども、日本人はそれを認めないということです。「日本人は才能とか能力がないのは、ただ運が悪かっただけだと思っている」と、中根千枝さんは『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書）の中で言っているのですね。これが同調圧力を生み出すわけ

ですが、私がよく例として挙げるのが、宝くじの高額当選者です。1000万円以上の宝くじに当選した場合、みずほ銀行に換金に行きますと、『〔その日〕から読む本』と言う小冊子をくれるそうです。その小冊子に何と書いてあるか。こう書いてあります。「一人でも話せば噂になるから気をつけろ」と。人に言うなというんですね。なぜそうなるか。すぐわかると思います。ねたみ・そねみ・ひがみ・やっかみ。日本は妬み意識がとても強い国だと思います。自分が高額当選者であることが「世間」に知れ渡ったら、大変なことになるわけで、「奢れよ」くらいならまだいいですけど、返す気もないのに「金を貸せ」とか。それを知っていますから人に絶対に言わない。

アメリカの場合ですと、よく見るのが、あそこでは宝くじのようなもので何十億円もあたった人でも、なんと顔出し・実名でメディアに出てきます。「当選したお金をどうやって使いたいですか？」との質問に、ニコニコ顔で「お母さんにあげたいです」とか平気で言う。「おいおい、大丈夫なのか。アメリカの殺人率は日本の20倍だぜ」などと、私などは心配する。しかし心配することはないわけです。なぜかというと、基本的にはアメリカは社会からできています。社会は個人からできあがっています。個人は「自分は自分、人は人」と考える。これが社会を構成している個人です。だから「宝くじに当たったなんて、よかったね」で終わり。「congratulations」、「おめでとう」。基本的にはこれで終わりだと思います。

日本の場合は絶対にそうならない。「共通の時間意識」や「出る杭は打たれる」ルールがあり、強固な「人間平等主義」がある。「なんであいつだけが、あんないい目に遭うんだ、許せない」となる。「自分は自分、人は人」とならない。しかも「身分制」のルール、「先輩・後輩」ルールというのがある。「先輩・後輩」という身分は基本的に客観的なものです。「格上・格下」、「年上・年下」、これも客観的なものです。ところが「人間平等主義」は頭の中にある主観的なものです。この客観と主観との「ずれ」、一種の「ねじれ」があるために、ものすごく妬み意識が強くなるのが日本社会ではないかと思います。たとえば日本では、会社の中で出世するためには人から妬まれないことが一番大事なのですね。妬まれると面倒くさいことになります。ほんとにみんなが、いつもそれを気にしながら生きているのが日本の社会です。

もう一つ例をあげますと、「ゴルフ保険」というのがあって、これも日本にしかない。ホールインワンを出した場合、ゴルフ保険に入っているとキャディさんにお礼をするとか、ゴルフ場に植樹をするとか、その費用にあてられるそうです。一番大きいのは友だちを呼んで宴会をする。ホールインワンをやった本人が、みんなからお祝いしてもらうのではなくて、自分がお祝いをしないといけない。なぜか。「お前がそんないい目に会うのは許せない」という「人間平等主義」があるものですから、みんなから妬まれないために、そういうことをする。そのために保険があるという話になっていくわけです。これが3番目の「出る杭は打たれる」ルールです。

四番目は「大安・友引」ルールです。「呪術性」のルールとも言います。「大安に結婚式をする。友引の日には葬式をしない」は、暗黙のルール、成文化されていないルールですが、しかしみんな几帳面に守っている。たとえば「恵方巻き」。1989年にセブンイレブンが初めて売りだしたものが、2000年代になって全国展開をして、今は2月3日の節分にはコンビニで恵方巻きがずらっと並ぶということになった。大阪の一部の地方でもともとあった習慣が、全国展開

したということなんですね。なぜこんなものがアッという間に全国展開したのか。実は日本人は、ものすごく信心深いからです。大学で学生に「あなたの宗教はなんですか？」と聞くと、「無宗教」と言う人が多い。私に言わせれば、日本人は「世間教」の熱心な信者であって、無宗教ではないと思っています。「世間」は1200年以上の伝統があります。古い歴史や伝統をずっと引きずってきているのが日本の社会で、先進国の中で、ものすごく古いものをこれだけ残している国はないと思います。その一つに「世間」があるわけですが、その中でそういう古いルールがたくさんあるわけですね。しかも世界標準は、イスラム教にしてもキリスト教にしても「一神教」なわけです。日本の場合、神さまがたくさんいる。そのへんに転がっているお地蔵さん、お稲荷さんがそうですが、呪術的な「多神教」の世界になっている。

『日本人はなぜ無宗教なのか』(ちくま新書)の中で阿満利麿さんが言っていますが、「日本は自然宗教である」と。「日本では死んだ時はご先祖になってあの世に行って、ずっと見守っていてお盆になると帰ってくる。そういう信仰が自然宗教だ」と。日本では古くから「自然宗教」ですが、これに対して海外では「創唱宗教」がある。教典があって教祖がいて教団がある。イスラム教もキリスト教も、そうです。しかし日本にはこうした一神教が支配した歴史がない。だから日本人が一番わからないのは、一神教である「創唱宗教」なんだと思います。

大分前、イラクで戦争が終わってサマーワに日本から自衛隊が行きました。そこで水を配ったり、学校の校舎を直したり復興活動をした。その時に、自衛隊はサマーワの子どもたちを集めて、「ねぶた祭」を青森出身の隊員が中心になってやったそうです。そうすると周りのイスラム教徒の住民から批判された。「うちの子どもを邪教に誘った」と。この感覚が全く日本人にはわからない。つまり日本人にとって宗教というのは、12月24日にクリスマスケーキを買ってきてお祝いをする。じゃあ、お前は、キリスト教徒か。1月1日に神社にお参りに行く。お前は、神道の信者か。お盆にはお坊さんを呼んでお経をあげてもらったり、お寺にお墓参りにゆく。では、お前は仏教徒か。家では神棚と仏壇が同居している。宗教的には全然違う。無茶苦茶といえばそう言えるし、一神教的にいえばこれは許せないはずです。つまり日本人の宗教意識は、カオスといっていいのです。これはもともと「世間」がもっていた意識で、「呪術性」のルールという形で1200年間の歴史があるわけで、古い意識がずっと生き続けてきたと言えるわけです。

ここでとくに問題なのは、「ケガレ意識」ですね。特に今回のコロナ禍で、感染者が「感染した」という理由だけで差別されたのは日本だけだと言いましたが、なぜそうなったのか。日本人の中に感染すること自体が「ケガレ」であるという意識が、どこかにある。そうした意識がどこかにあるので、感染者差別という現象が起きたというということです。犯罪とか、病とか、死とかが、ケガレと考えられるという「呪術性」の意識、これが「大安・友引」ルールから出てくる。

かつてのヨーロッパの場合に、告解をする時に司祭がもっていたマニュアルで「贖罪規定書」というのがあります。その中に、どういうことが罪になるかが書かれていた。日本でいうところの大安の日に結婚式をやるとか、友引の日に葬式をしないとか、そういうことをやった時に罪を犯したとして、「パンと水だけで一カ月」という贖罪を科された。そのことを通じてキリスト教会は他の伝統的な信仰、民間の呪術的な信仰を徹底的に否定していった。徹底してつぶしていった。

その結果、何が生まれたかというと、「社会というのは合理的である」という考えです。ところが「世間」というものは呪術的である。私は「謎ルール」と言いますけども、合理的根拠のない「世間」の「謎ルール」を歴史的に解体していったのが欧米であると。近代というのは合理化の貫徹の時代であり、マックス・ウェーバーが言うように「脱魔術化」です。合理的な世界をつくったのが近代なのですが、社会、とくに近代市民社会はそういうものからできている。しかし「世間」は、合理的根拠のない呪術的な「謎ルール」からできあがっている、というのが日本の特徴です。

最後に、「では、どうすればよいのか」を考えてみます。まず必要なのは、「社会と世間の違いをはっきり認識する」ということです。日本では、社会はタテマエで「世間」がホンネという二重構造になっている。会社もそうだし、学校もそうだし、ご近所も、サークルも同じです。その中で自分が息苦しいと思っていても、その正体が何かということがわからないとストレスが溜まっていく。「社会と世間を峻別する」ということが非常に大事です。その中で「謎ルール」を見つけ出すことも大事で、この1月にインディードという人材派遣の会社が主催した「有識者会議」に参加し、ジェンダーギャップについて議論しましたが、日本の会社の中には合理的根拠のない「謎ルール」が山のようにある。たとえば「なぜか女性だけが早く来て掃除をしないといけない」というルールが会社の中にある。そういう「謎ルール」を、ちゃんと見つけ出してつぶしてゆかないといけないという話をしたのですが、出てくるわ、出てくるわ、山のように「謎ルール」が出てきます。「謎ルール」を見つけ出してつぶしてゆく、そういうことも必要だと思います。

つぎに、総務省の『情報通信白書』(2014年版)によれば、SNSのツイッターの匿名率が、日本は75%ぐらいですが、他の国のデータを見ると、アメリカは約35%、イギリスは31%、フランスは45%、韓国は約31%、シンガポールは約39%。日本は海外と比較すると、匿名率がものすごく高い。なぜそうなるのか。個人として実名で発信すると、炎上したり叩かれたりするからです。日本には「旅の恥はかき捨て」という「世間のルール」があって、自分が世間から一旦離れてしまうと「世間のルール」に縛られなくなって、傍若無人な行動をとることが多い。旅に出た時、自分が「世間」から離れるので、そのルールを守る必要がなくなる。これと同じことがSNS、ネットでも起きます。つまり匿名になることは、「旅の恥は吐き捨て」状態になるわけですから、誹謗中傷を平気でやるようになる。その結果、木村花さんのように、自殺に追い込まれるという深刻な問題も起きる。だから、スマホのボタンをピッと押す前に、「実名でも発信できる内容かどうかを、いったん立ち止まって考える」ということが、きわめて大事だと思います。

さらに必要なのは、「空気は読んでも従わない」ことです。これは「みんな個人になろう」ということなのですが、なかなか難しい。たとえばみんなマスクをしている時に、まず周りを見てから判断するので、マスク一つとることも大変だと思います。最近政府は「マスクの着脱は個人の判断で」と言っています。しかし実は自民党は個人を認めていない。幸福追求権を定めた憲法13条冒頭の「すべて国民は、個人として尊重される。」について、2013年の自民党の「日本国憲法改正草案」では、「個人」を消して「人」にしているのですね。その理由を、個人という言葉は「個人主義を助長してきた嫌いがあるので」と説明しています。私は、都合のよいときだけ個

人を持ち出す自民党政権には、個人という言葉を使う資格はないと思っています。自民党は個人を認めてないのですから。しかも「世間」に個人は存在しないわけですから、空気に従わないのは勇気がいることですが、まさに個人として、従わないことも時には必要ではないかと思います。

時間がきましたので、とりあえず、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。